

古伊万里色絵婦女図壺の一作

中 川 千 咲

古伊万里彩磁は初期については柿右衛門、古九谷などとの問題や、不明な点もあつてか見るべき遺品は案外少なく、盛期以後の華麗ないわゆる古伊万里様式のものが多いのは知られる通りであろう。これらを通じて眺めるに、ここに掲げた壺は、文様や彩絵の法が珍らしくかつ優れた作でもあるので、調査したのを機に紹介し、更に古伊万里の流れにおける意義などについても触れてみたいと思う。

これは磁胎の壺（図版Ⅰ・Ⅱ）で、高さは三七・七糎あり、口は広ろ目、撫肩で、裾はややすぼみ、堂々たるうちにも豊かで、穏やかな形姿をしている。器表にはややくすんだ白色の釉をかけ、その上に、頸には唐草文様、肩は卍字の地文に枠に入つた宝尽し文様を三方に置き、胴は菊唐草の枠で三方に割り、それぞれの中に読書、花売り、舞踊姿の婦女図を描き、裾には簡単な曲線文様をめぐらしている。彩色は、髪や顔の部分などに黒を用いる他は、赤と銀で彩つてある。銀は大部分がやけて黒くなっている。内面にも釉薬をかけてあるが、口辺内側には無いのを見ると、やはりもとは蓋があつたものと思われる。

古伊万里色絵婦女図壺の一作

形もよく、文様は構成面白く、筆もののびのびとしつかりし、素朴さもあるが、清新で華やかな趣ある優れた作である。胎土、釉薬、顔料、作行からして古伊万里に入るものといえようが、形の細部、一種独特な唐草で枠取した文様、また染付が無く、しかも赤と銀で彩っている点など、古伊万里として誠に珍しいものでもある。

なお肩から胴の上部に破損があるが、補修されている。

この壺は何分にも珍らしいものではあり、製作期、また古伊万里の流れにおける意義などを考察して行く上に必要でもあるので、更に細かく眺めてみたいと思う。

先ず形であるが、古伊万里で近いものを求めると、色絵岩に菊図壺（挿図1）、色絵梅図壺、色絵楼閣遊女図壺（挿図2）などが挙げられる。岩に菊図壺（挿図1）は形を李朝の壺に学び、撫肩で胴上部がやや張り、以下真直にすぼんでいる。染付はいささか濁った感じの山ゴスの色調で、赤も淡彩、文様も自由奔放で古格があり、古伊万里色絵初期のものといわれている。梅図壺は高さ四七・三糎、撫肩で、頸はやや上方に萎み、腰は直線状に底辺に流れている。胴の中央に繋ぎ目が表われ、大

きさの割に重く、未だ技術の未熟さを物語る。梅樹の表現、筆使いに形式化も窺われるが、寛文(一六六〇—一六七三)頃の作とされている。楼閣遊女図壺(挿図2)は高さ四二糎、太い首が垂直に伸び、撫肩で、胴上部はやや張り、以下直線的に流れすぼんでいる。

胴には三方割割内にそれぞれ赤、金、呉須で、楼閣、桜、遊女を描き、肩には遊女が文を書くところを表わし、地には全面に濃い藍色の染付で牡丹唐草文を填めた艶麗なものである。この遊女の髪が「はねもとゆひ」とて、正保(一六四四—一六四八)頃流行し、延宝(一六八三—一六八七)頃まで続いたところから、その頃か、あるいはこの髪型が、正保以後寛文頃には九州諸地にも行われたと見て、寛文頃の製とも見られている。^{註1}いずれにせよ華麗ないわゆる古伊万里様式の完成する以前のものといえる。

これらに通じて見られる形の特色は、素直な撫肩で、胴のやや上部が張り、以下直線状的に底に流れ、高台の上に据った点である。頸はこれらの類の多くが上がすぼんでいるようではあるが、^{註2}必ずしもきま

いるようでもない。

更にこれらより製作期の下る元禄(一六八〇—一七〇四)頃と見られる壺にも、この特色は存するが、しかし、のびのびとしたところがなく、形式化が窺われる。

また、色絵松鷹鶴鳳凰図六角形壺や、色絵牡丹菊図壺のようなものがある。前者は高さ六二・二糎の大壺で濃密な彩色を施した元禄期の作、後者はやはり多彩ながら瀟洒な感もある壺で、元禄をやや降ると見られるが、頸短かく、肩が張り気味で、胴から裾底への線がやはり直線的ながら長く、形の上の重心がやや上にあって、形をやや異にしているのである。

一方、伊万里と関係の深い柿右衛門の壺にも部分的にしても似たようなものがある。色絵花鳥図壺(挿図3)、人物菊牡丹図壺など柿右衛門赤絵創始期に入ると見られている類で、頸短かく、肩やや張り、胴は底面に沿って緩やかな曲面をつくってすばみ、高台の上に据っており、全体の形姿は異なるが、頸短かく真直に立つ口造りに似たところも窺われる。

挿図1. 古伊万里 色絵岩に菊図壺

挿図2. 古伊万里 色絵楼閣遊女図壺

かく並べて眺めてみると、この壺と全く同じ形のものは無いにしても、撫肩で、胴上部が張り、以下直線的にすぼんだ形、その調子は、やはりはじめに述べた古伊万里初期の類と最も近いと思われる。

次に文様について述べよう。先ず頸には簡単な花文を中心に先の巻き込んだ唐草を軽く表わしている。これに似た構成の唐草は中国明赤絵の鉢などには見る。柿右衛門は初期の壺には、頸に文様は施してないし、このような唐草も無いが、前に掲げた伊万里のものには似ていないにしても、頸に唐草をめぐらしたものはある。

肩は綾形地に三方に花形の枠を設けて宝文を入れている。これも明代に行われており、初期柿右衛門の壺には、単位文は違うにしても同じ構成のものが描かれているし、伊万里においてもしばしば用いられているのであるが、この壺の場合は伊万里盛期のものより、可成に古様であるのが注目される。

胴から裾にかけては、七宝繫地に凹凸の多い円で三方に割り、それぞれ内部を菊唐草と思われる唐草文でかこみ、中に読書、花売、舞踊姿の婦人図を描いている。この三方に割る装飾法は古伊万里の壺には行われているし、婦人図もしばしばあるが、枠も普通線だけで、このように上下左右に花を置き、上下の花から唐草をのばして更にかこむといったものは見ないし、その中に婦人図をおいた例も知らない。このような図様

は日本の工芸品の文様としては他にも見ないので、求めれば西洋の版画、本の表紙などに似かよったものがあるように思われる。その唐草がまた珍しい。有田の天神森上窯址出土の磁片に、写真で見たただけなので当を得ないかも知れないが、強いていえば似た感じの染付の唐草がある。しかし例え近似しているとしても、この窯は高麗陶工によって創められた有田磁器創業期のものではあるし、この壺の唐草との関連を求め

るのは無理であると思う。また古万古の更紗文様を写したと思われる文様に似たものがあるが、これらは時代が降るので関係はない。^{註3}

挿図3. 柿右衛門 色絵花鳥図壺

ともかくこの唐草で人物を囲むといった装飾法や唐草の様式、趣致から見ると、西洋のものを倣っているのではないかと想像される。江戸初期の海外交易は、寛永十五年（一六三八）に鎖国令が出、十八年（一六四一）には平戸の商館が廃され、長崎の出島に移されたが、オランダを中心とした貿易が続けられ、

元禄の終り頃幕府の方針によって貿易の縮小が講ぜられるまで可成行われたようで、寛文頃には年間十隻以上のオランダ船が入港したようでもある。その間、中国や南方諸地域、オランダの陶磁や工芸品も輸入され、また有田磁器が輸出され、中にオランダの注文により、そのサンプルにもとづいて異国向きの意匠のものも多く作られた。これらは少くも万治（一六六〇）頃には行われたようであり、寛文四、五年（一六六四―五）には、赤絵のものも見本によって作られ輸出

されたことが記録に見えている。^{註4}遺品では殊にいわゆる型物などには忍冬文、宝繋文などの欧風文様の複雑華麗に仕立た類が盛んに用いられているし、また彼の注文による全くの欧風文様のものも作られており、これらの点から考えても、異国の文様を倣うことはあり得たとはいえよう。

次に中の婦女図を見よう。古伊万里には婦女図の文様を扱ったものは

かなりあり、盛期以降のものには艶麗な趣の類が多いが、これは一応別として、初期と見られているものには、前述した色絵楼閣遊女図壺(挿図2)や色絵婦女遊楽図六角壺(挿図4)、松牡丹菊婦人図花瓶などが挙げられる。婦女遊楽六角壺(挿図4)は高さ三二・〇厘の六角型壺で

あるが、古伊万里初期の姿があり、肩と裾には牡丹、菊唐草を填め、胴には籬の内一方に松、桜、他方に牡丹、菊を配し、花下に遊楽する婦人達を描いている。赤、金、呉須で色彩つてあるが、元禄期の華麗な作調より総てに古様が窺われるところから、元禄以前との作と推定されている。松牡丹菊婦人図花瓶は高さ五三・〇厘で、前者と形は違うが、人物、桜などの表現、配色など殆んど同じで、製作年代も同じと見られるものである。

ここに掲げた壺はこれらの作の絵のように、器表にはめ込んだといったような装飾性、堅さはなく、絵画的で、のびのびとして潑刺さも窺わ

れ、婦人図、風俗図を扱った点では同じであっても、表現に、描法に余り近似性は見られないのである。

絵としてなかなか好ましいし、浮世絵などとの関連も考えられようが、両者の関係を明細に物語る例も簡単には求めにくいようなので、題材や、風俗的な点から瞥見してみよう。

読書、花売りは近世風俗画、浮世絵などにもまま扱われているが、このような舞踊図は珍らしい。桜花を一つのせた四手網のようなものがかついているが、恐らく、能における「桜川」を歌舞伎に採り入れたものの踊の図と見られる。能のものが歌舞伎に採り入れられたのは、少くも元禄以前ということであるから、これも元禄以前から行われていた踊と思われる。

衣裳はどれも、身幅が広く、立つまが短かく、袖口が狭く、かつ帯もせまく、完全に元禄以前の衣服の形式を示している。また身幅

挿図4. 古伊万里 色絵婦女遊楽図六角壺

の広い衣服を上手にまとめて着た着用法、その姿態にもそうした時代の面影を窺わせる。読書の着物に見るように肩に菊などの大文様を配し、それを中心に文様が広がる装飾法、また花売りの文様の如く雲形などの大文様を全体に配した類は、染織史上特に寛文文様と呼ばれ、元禄やや以前に流行した文様で、万治四年(一六六二)から寛文三年(一六六三)の間に書かれた「かりがねや衣裳注文控帳」(挿図5)や、寛文七年に刊行された「御ひいなかた」などにも近似のものが見られる。舞踊の衣裳

は、能の衣裳姿から変ったもののようであるが、裾の藤の大文様は、江戸前期の工芸品にはしばしば用いられているし、本多平八郎姿絵屏風の中には、同じように裾に大きな下り藤を表わした着物の婦女像も描かれている。

また寛文文様といわれる類のものは元禄期の如く、友禪染などによる染が完成されていなかった時期だけに、その文様はほとんどが鹿の子と刺繍によって表わされていた。読書や花売の衣裳を見ても菊花や、雲形は明らかに鹿の子であり、七宝文様の部分も染とは見えず、恐らく刺繍でないかと思われるもので、絵ではあるが染織技法からも、元禄以前の様を物語っているのである。

髪型は読書のは御所風まげといい、普通の婦人の間に行われたのは早いとしても、遊女の髪としては元禄以前、寛文頃に現われ、盛んにゆわれたようであり、寛文九年（一六六九）板行の師宣の墨摺大本（挿図6）

などに同じような髪型のものが^{註5}見られる。

花売りの髪は立兵庫とて桃山時代から行われ、まげが次第に小さくなりつつ続くが、この図のはその中間位のものとして、先ず元禄前位の形と見られている。舞踊図のはさげ髪で、江戸初期から以降行われたものであるが、遊女に見られるのは、前期、中期に於てであったといわれる（挿図7）。

これら髪型、衣裳の形式、文様などからして三女図とも元禄以前、更には寛文頃の風俗を写しているものと見て差支無いであろう。

また、三図とも風俗はかなり細かく正確に写しているようであるし、絵としても纏まり、その画風からしても、その頃の絵本、版画などの如きを手本としたものと思われる。絵本は江戸では師宣らのものが既に万治（一六五八）^{註6}年間より続々と刊行されていたし、上方ではそれより早く出されていたようであり、古伊万里には元禄元年（一六八八）版の「女用訓蒙図彙」と同じような遊女図の盃があり、それ以後絵本あるいは、ひいなる形を写したと見られるものはまた多いのである。柿右衛門においても延宝六年（一六七八）京都にて刊行された「女詩仙集」、寛文年間に翻刊された明末の「八種画譜」、貞享五年（一六八八）刊行の「友禪ひい

挿図5. 「かりがねや衣裳注文控帳」より

挿図6. 師宣 墨摺大本 寛文9年板行（元禄古版画集英より）

挿図7. 師宣 墨摺大本 延宝5年板行（元禄古版画集英より）

ながた」などを写したと思われるものなどがある。^{註7} また当時伊万里の陶商達によって、文様の参考に絵本類が運ばれたこともあったろうし、今数多くの絵本類に当るとまは無いが、これらの事情からしても、絵本などとの関連は充分考えられる。

以上見て来たところから、この壺の時代を推定し、この特異な壺の古伊万里における位置、意義などについて憶測ながら試みたいと思う。

この壺は、形に同じものは無いにしても先ず古伊万里の元禄以前と見られる他の壺に似るし、釉薬は乳白手に近く、顔料は盛期のもののよう
に精選されておらず、文様の婦女図は寛文頃の風俗をよく写しているところから、一応寛文末頃から元禄の始めに至るまでの製と考えたい。更に前述の楼閣遊女図壺や婦女遊楽図六角壺などよりは、作行、型にはまらぬのびのびした文様に古様が窺えるので、それらの壺がいわれるように延宝(一六七三—一六八〇)頃とするならば、これはそれより以前恐らく寛文末頃を降らぬ作と思われる。

この壺が寛文末頃の作とすると、特異なものだけに、古伊万里の歴史上如何なる位置、意義を有するかを考えてみなければならぬ。

古伊万里の磁器開窯、創業期についての研究は、近頃かなり進んできているが、赤絵現出後盛期に至る間については知られるように柿右衛門との関係、あるいは従来から陶磁史上の大きな問題となっている古九谷との関係など、複雑な問題が多く、しかも未だ解決の目安もついていない状態である。これらの問題は容易に解明出来るものでないし、触れることすら大きに過ぎる問題なので、ここではしばらく置き、現在の古伊

万里研究の段階のうちにおいて見ることにする。

古伊万里の時代区分についてはいろいろ見解もあるようであるが、一応左の如く区分されている。

帰化朝鮮陶工李三平が西肥前で泉山磁石を発見し、白磁焼成を実現した元和二年(一六一六)より寛永中期(一六三三頃)を創業期、それから寛永末期から寛文中期あるいは寛文末、延宝までの間を初期とし、企業的傾向を持ちはじめ、意匠も和様化し、更に赤絵技法を取り入れ、盛期の絢爛な古伊万里様式、精巧な型物様式の基礎を作ったとする。以後前代に芽えた古伊万里様式が完成され咲きほこった間、即ち享保、元文あるいは宝暦に至るまでを盛期、それ以降文政十年(一八二七)有田皿山が全焼にあうまでを後期としている。^{註8}

この壺の製作されたのは、先の如く、寛文末延宝頃とすれば、古伊万里初期の終りで、赤絵の技術も進み、文様なども従来の中国影響の濃いものから和様化に移行し、種類も多くなり、いわゆる伊万里様式が形造られつつあった頃に当る。ただ遺品は案外少なく、先に形や婦女図六角壺(挿図4)について述べた折、挙げた類の他に注目すべきものは次の如きがある。

少し時代は遡り、染付であるが、芙蓉翡翠図大皿、松梅唐人図耳付壺がある。大皿は径四〇糎近いもので、見込に日本画風の芙蓉、秋海棠それに鳥を装飾的に表わした皿で、寛永頃黒牟田山辺田窯の産とされている。そして創始期の朝鮮、中国風ものから和風に移行する過渡期的な作を示すものといわれる。耳付壺は高さ二三糎、胴の前後に松と梅を、その中間、肩には弦月を、下には琴を抱く高士を描いているが、構図も

挿図8. 古伊万里 色絵桃竹唐人物図瓶

里彩磁がはじめは柿右衛門や中国彩磁に倣ったと考えられるところから、これはそうした作例として扱われている。蓋物は径一八・六糎、高さ一五・五糎の大きさと、勁い太い黒線と、赤、緑、黄、紫で牡丹を一面に描いているが、画調が古九谷に似ているため、古九谷として扱われたこともあった。しかし胎土、彩料、技法は古伊万里のものであるし、古伊万里では多い蓋物の中でも、蓋が比較的低く、肩が張り、摘みが削り出しになった古様ではあり、古伊万里彩磁初期の製と見做されている。

ついで元禄をやや遡ると見られる類には先の色絵岩に菊絵壺(挿図1)、梅図壺、楼閣遊女図壺(挿図2)、婦女遊楽図六角壺(挿図4)、松牡丹菊婦人図花瓶の他には鳳凰菊牡丹図深鉢(挿図10)、花束鳳凰文大皿などが目につく。深鉢はもとは蓋付であったと思われるが、堂々たる姿で、器表を雲形で二方に割り、内に牡丹外に鳳凰、菊を赤の描線、黝藍色の呉須渲染、金彩で表わした雄渾な趣のもの。大皿は見込に花束を赤、金、呉須渲染で描き、周辺はほぼ前の深鉢と同様の図様、彩色で飾っており、両者製作年代も同じと思われる。

これら元禄をやや遡るといわれる類と、先のそれより前と見られる類との文様における関連性を求めるに、岩に菊図の壺(挿図1)の装飾法、菊岩の表出が初期柿右衛門の花鳥図壺(挿図3)に似たところがあるといえる位で、他には一寸見出せないのである。もちろん両者の採り上げたものが極く僅かであるのにもよるが、ともかく関連性が見出せる遺品が少ない。遺品のあるものがいわゆる古九谷の中に含まれているとしても、古九谷とよばれるものの中にも、以上の元禄を遡る類に先行し深いつながりをもつと考えられるものは見当たらないのである。

簡潔で、筆致も雄勁である。胎土、釉調、作風などに寛永頃の百間窯の陶片によく似ているところから、その頃の同窯の製とされている。

色絵では、桃竹唐人物図瓶(挿図8)や牡丹蓋物(挿図9)などがある。瓶(挿図8)

挿図9. 古伊万里 色絵牡丹文蓋物

は高さ二六・八糎、両面に桃と竹を描き、その下に数人の唐人を配し、緑、青、黄、赤などで彩っている。柿右衛門あるいは古九谷に通ずるところもあるが、胎土、彩料、技法からして伊万里の産であり、初期伊万

この壺もはじめの類の中には一見したところ関連のありそうなものは無いが、しかし詳細に見ると、唐草の描き方、筆使いと蓋物（挿図9）の牡丹の描法、婦女図の細くのびのびした顔や手の線と桃竹唐人物図瓶（挿図8）の顔、手の描方には通うところもあるように見えるのである。

この唐人物図瓶（挿図8）は前述の如く柿右衛門に通ずるものがあり、初期伊万里彩磁のはじめは中国乃至柿右衛門に倣ったと考えられるところからそうした一例とされているが、この瓶と掲げた壺とに僅かにしても関連が窺われることや、壺の肩、底に近い部分の装飾法、文様に柿右衛門の花鳥図壺（挿図3）などと表現に似たところがあることなどからすると、この壺も柿右衛門様式をすっかり脱し切っていないものと見られる。

そして元禄をやや遡ると一群の装飾法や文様と較べるにかなり相違があり、それらの頃のものとすれば、この壺の柿右衛門あるいは初期的な風は何らかの形でもっと整理されていてもよいように思われる。つまりそれらに先行するものであろうし、更にはよりはじめの類に近いものと見做されよう。

挿図10. 古伊万里 色絵鳳凰菊牡丹図深鉢

古伊万里では前期の末頃から染織文様や風俗的なものを文様として取入れるようになったというが、この壺から見ると、はじめは柿右衛門を未だ脱しきらぬうちに、風俗的題材を取入れたものと推察されるのである。そして表現法とともに、題材も同じ婦女図を扱いながら婉麗さを求めて変って行ったものと考えられる。この壺は古伊里の文様、表現法の大きな転換のはじめの様相を示すものであり、また素朴な清新さが窺われ、かつ華やかなうちに品すら備えているのは、これも古伊万里風

俗文様のはじめの姿ゆえなのであろう。

古伊万里婦女図の文様は、婉麗な趣のものに大きく変っていたのであろうが、色絵桜婦人図壺（挿図11）のような作も注目される。この壺は古伊万里盛期に見る壺の形をし、頸、肩、裾に七宝地に複雑な兜花文を入れた花形文を配し、胴には桜下に婦女図を描いたもので、形、その風俗、作行などからして、先ず元禄か、それを過ぎた頃の作と見られる。

挿図11. 古伊万里 色絵桜婦人図壺

がしかし、装飾構成婦女図の扱いなどにこの壺に通ずるものがあるように見え、この点、婉麗へと大きな転換しながらも、一部には初期の風が変化はあるとしても、なお流れていたと見たいのである。

これらの点から見て古伊万里の風俗文様のはじめを考え、その展開を見て行く上に、この壺はまた大きな役割と意義を持つものといえよう。

以上、この壺を解説し、古伊万里の風俗文様の一端について憶測を述べたに過ぎないが、ともかく、古伊万里として、珍らしく、貴重な作を紹介し得たことを嬉しく思うとともに、古伊万里の殊に文様の研究に多少なりとも参考になることがあれば幸である。

拙稿を草するに当って、浦山政雄氏に舞踊図、橋本澄子氏に髪型、岡畏三郎氏に版画、絵本、田実栄子氏に衣裳についてそれぞれご示教にあずかったことを感謝する次第である。

註

- 1 小林太市郎「元禄以前の伊万里赤絵瓷器」(同氏著『柿右エ門と伊万里』)
- 2 水町和三郎「伊万里磁器の創業時代」(古伊万里調査委員会編『古伊万里』)
- 3 古万古は伊勢桑名の沼波弄山(一七一八〜一七七七)によって元文(一七三六〜四一)頃はいまるとも伝えるが、宝暦(一七五一〜一七六四)頃優れたものが焼かれたと思われる。
- 4 手塚文蔵 永竹威「長崎出島を基点とした海外貿易」(古伊万里調査委員会編『古伊万里』)
- 5 渋井清編「元禄古版画集英」の二、三図などにも見られる。
- 6 仲田勝之助「浮世絵派の絵本」(同氏著『絵本の研究』)に田中喜作氏説として、師宣は万治三年より元禄八年の間に一二七部の絵本を刊行したことが掲載されている。
- 7 小林太市郎「元禄以前の伊万里赤絵瓷器」(同氏著『柿右エ門と伊万里』)

古伊万里色絵婦女図壺の一件

8 水町和三郎「古伊万里の製品」(古伊万里調査委員会編『古伊万里』)

永竹威「伊万里赤絵の鑑賞」(同氏著『日本の赤絵』)を参考にした。

なお例証のため掲げたそれぞれの作品については、古伊万里調査委員会編「古伊万里」、永竹威著「九州の古陶磁」、「世界陶磁全集四、江戸篇上」などを参照した。